

縁結び

野村胡堂

一

「八、まあそこへ坐れ、今日は真面目な話があるんだ」

「へエ——」

八五郎のガラッ八は、銭形平次の前に、神妙らしく膝小僧を揃えました。

「外じゃねえが、——手前も何時までも独りじゃあるめえ、いい加減にして世帯を持つ氣になっちゃどうだ」

平次は二三服立て続けに吸った煙管をポンと投り出して、八五郎の方へ心持身体をねじ向けるのでした。

「へエ——」

「へエ——じゃないよ、相手の選り好みをしているうちに、月代の光沢がよくなってよ、折角のいい男が薄汚くなるじゃないか」

「それ程でもねえよ、親分」

八五郎はそう言いながら、ニヤリニヤリと長い顎を撫でるのです。

「馬鹿野郎、いい男の氣でいやがる」

「驚いたね、どうも、叱られているんだか、女房の世話をされているんだか、見当がつかねえ」

「両方だと思え、冗談じゃねえ、手前のお袋はそればかり心配して死んだじゃないか。八の野郎も氣はいいが、あの様子じゃ先々が心細い、せめて氣立てのいい嫁でも貰ってやって、安心してから死んだ配偶の側へ行きたい——とな、それに手前の叔母さんも

そう言っていたよ——」

「親分、貰いますよ、多寡^{たか}が女房でしょう」

「多寡が女房——」

「へッ、叔母さんなんかと来た日にや、猫の子だの嫁だの、生物^{いきもの}を貰うことばかり考えてやる」

八五郎は少し忌々^{いまいま}しく舌鼓^{したづみ}などを打ちます。

「死んだ姉の子の手前に、身を堅めさせることばかり考えているんだ、悪く言っちゃ済むめえ」

「だがね、親分、女房を貰うのも悪くねえが、煮豆屋^{にまめや}のお勘坊はいけませんよ」

「大層嫌いやがったな、お勘ツ子が落胆^{がっかり}するぜ」

平次は少しからかい気味です。飛切り真剣な話にも、こんな遊びが入らないと、滑^{なめ}らかな進行をしない二人の間だったのです。

「そんな話なら、あつしは帰りますよ、親分」

「あわてるなよ、八、これから話が本筋^{へえ}に入るんだ、——叔母さんもそう言ったぜ、同じことなら八五郎の氣に入ったのがよからうと、な。よく解^{わか}った話じゃないか。目を付けた娘がありや、今のうちにそう言って置く方がいいぜ、後で実は言い交したのがあるなんざ通用しねえ」

「そんな氣障^{きざ}なのがあるものか。親分の前だが、こっちだけで氣に入ったのなら、江戸中には五万とあるが——」

「大きく出やがったな、せめて町内^{ぼんまゑ}だけにしてくれ。江戸中の娘に当^あっていちや、盆前^{ぼんまゑ}に埒^{うち}があかねえ」

「町内だって、いい娘が三人や五人はありますよ。もったもあつし、なんかに払下^あげてくれそうなのはたんとはねえが——」

「言ってみな、何事も縁だ」

「縁は異なもの——と来やがる、へッ、へッ、まず黒田五左衛門様のお嬢さん」

ガラッ八は大きな指を無器用らしく折ります。

「馬鹿野郎、相手は八百石取の御旗本の総領娘だ。安岡やすおかつ引びきにくれるかくれないか考えてみる」

「だから、あッしは嫌だって言っただじゃありませんか、此方で欲しいのは、なかなか向うで下さらねえ」

「そんなのは下さらなさ過ぎるよ、もう少し手頃なのを申し上げな」
「手頃なのと来たね、有馬屋のお糸などはどんなもんで——」

ガラッ八は少しやに下がります。

「呆れた野郎だ。有馬屋は町人に違いえねえが、神田で二三番と言われる万両分限ぶげんだ。手前なんか娘をくれるわけはねえ、もう少し手軽なのがあるだろう」

「だんだんせり下げて、煮豆屋のお勘ッ子なんか嫌ですぜ、親分」
「心配するな、お勘ッ子までにはまだ間がある。——それから誰だ」

平次も少し面白そうです。

それを苦々しく聞いた様子で、

「お前さん、そんな事を——」

女房のお静が口を出します。

「黙っている、お前なんかの知ったことじゃねえ」
と平次。

「乾物屋のお柳かんぶつや りゅう」

ガラッ八は続けます。

「うむ、これはいい」

「もう一人、棟梁とうりようのところのお留坊とめぼうなどはどんなもので——」
ガラッ八は言い切ってしまったて、ひとごとのようにニヤニヤしております。

「町内の三人娘へ、門並眼をつけるのは欲よくが深過ぎるぜ、——三人とも手前が言い交かわわしたわけじゃあるめえ」

「言い交しましたよ、親分」

「何だと？」

「独り言でね、ヘッ、ヘッ」

「この野郎」

どうも手の付けようがありません。

「だから放ほうって置いて下さい、どうせこちらの思うようにはなりやしません」

投げたことを言う八五郎の言葉には、何がなし諦あきらめがありました。
た。

「ね、お前さん、八五郎さんの本当に好きなのは、三人のうちでも、乾物屋のお柳さんですよ」

お静は火鉢の鉄瓶てつびんにさわるような恰好をして、そっと平次の耳みみに囁ささやくのでした。

「そうかい、——だが、あの娘には、縫箔屋ぬいはくやの丹次が附ついていててえじゃないか」

「え、それからもう一人、有馬屋の番頭——菊石あばたの又六が——」
「娘一人に婿三人はうるさいな、こいつはあきらめた方が無事かも知れないぜ、八」

平次も妙に深入りした話を引戻し兼ねて、淡あわい悔くいに似たよう

なものを感じた様子です。

二

この話があつて間もなく、三人娘の運命に、恐ろしい呪いが降りかかりました。

それは、三月の節句が過ぎて三日目。

「た、大変ッ、親分」

八五郎が鬘節を先に立てて、磔のように飛込んで来たのです。

「何だ、八、請合い三日に一度ずつは大変を喰わされるぜ、手前と附き合っていると、つくづく寿命の毒だと思うよ」

房楊枝を井桁に挟んで、ガボガボと嗽をやった平次、一向物驚きをしない闇を、ガラッ八の方にふり向けました。

「親分、お柳が殺されましたぜ」

「――」

「乾物屋のお柳が、妻恋稲荷の境内でやられていますぜ」

「何だと」

「行つて見て下さい、大根畠の金太の野郎が、一と足先に嗅ぎ付けて、さんざん搔き廻しているのを見て、あつしはここへ駆け付けたんだが――」

「騒ぐな、八」

そう言いながら、手早く顔を洗つて、着換えをした平次、顎を一つしゃくつて、ガラッ八と一緒に現場へ飛びました。

ツイ二三日前噂をしていた乾物屋のお柳、――ガラッ八も満更でなかったらしい、町内の評判娘の死は、平次の職業意識を、ほ

んの少しばかり湿しめっぽくします。事件を報告したガラッ八が、日頃の躁はしゃぎ切った調子に似ず、妙に沈んでいたのは、日頃平次に楯たてをつくことばかり考えている若くて野心的な岡っ引、大根畠の金太に対する反感ばかりではなかった様子です。

妻恋坂上のささやかな稲荷、見通しの木連きつれ格子の前、大きな賽さい錢箱せんばこの蔭に隠れるようになって、紅あけに染んだ娘が一人、浅ましくも痛ましい姿を、まざまざと三月の朝陽に照らし出されているのでした。

「寄るな寄るな、見世物じゃねえ」

町役人と番太が声を潤からして弥次馬を迫り散らしている中へ、平次と八五郎は飛込んだのです。

「お、錢形の」

「大根畠の兄あにい哥か」

神田と湯島に、自然睨み合った形になっている御用聞が二人、娘の死骸を挟んで妙に改まります。

「見当は付いたのかい、大根畠の」

平次は死骸の上に眼を落しました。

「いや、何にも判らねえのさ」

金太は田螺たにしのように、心の殻を鎖とざしました。

殺されたお柳は、有馬屋のお糸、棟梁吉五郎の娘お留と並んで、明神様の氏子の中に、三つ星のように光った娘だけに、碧血あおちに浸ってこと切れた姿は、言いようもなく凄艶を極めました。

傷は背後うしろから喉笛のどぶえを右へ斬られたもので、髪も乱れず、衣紋えもんも崩れず、蠟ろうのような顔が仏作りで、半面の血潮を浴びたにしても、清らかにさえ見えるのです。

「刃物は？」

平次は心持あたりを見廻しました。

「これだよ」

金太はさすがに隠しもならず、懐中から手拭に包んだままの血染の小刀を出して見せます。

「よく磨ぎ込んであるね。柄に少し藤を巻いて、——素人の使う品じゃねえ」

「この通り、焼印が捺してあるよ」

金力は掌の中に小刀の柄を返して見せました。裏には丸に吉の字の焼印がマザマザと捺してあるのです。

「そいつは？」

と平次。

「大工の吉五郎の道具だよ」

「えッ、——お留坊の親父の？」

「その通りさ、こんなに早く犯人が挙がるとは思わなかった。

下っ引が二人飛んで行ったから、追っ付けしよっ引いて来る筈さ」

大根畠の金太はこの上もなく得意でした。銭形平次の鼻をあかした快感にひたって、ニヤリニヤリと悦に入っております。

「そいつは変じゃないか、大根畠の兄哥」

平次は顔を挙げました。

「何が変なんだ、銭形の」

「傷と刃物が合わないぜ、——お柳の頸筋を斬ったのは、薄刃のヒ首だ。肉もはずずに、糸を引いたように見えるが、うんと深く切り込んでいる。そんな肉の厚い三角に尖った小刀じゃない」

「——」

「下手人は誰だが解らないが、お柳を殺したのは、その吉の道具でないことだけは確かだぜ」
平次は静かに言い切ります。

三

「八、見世物にされちや死んだお柳が可哀想だ。手前も満更知らない仲じやあるめえ、菰でもかけてやるがいい」

検屍の済まないうちは、死骸を動かすわけにも行きません。平次はそう言つて、妙にしょんぼりしている八五郎を振返りました。

「へエ——」

ガラッ八は素直に立ち上がつて、近所から菰を借りて来ると、お柳の死骸の上にそつと掛けてやりました。いや、その菰をかけるのさえも痛々しい心持でしょう。弥次馬を叱り飛ばした自分が、ツイ吊い心で、半分ほど隠したお柳の美しい死骸に目礼したのです。

「おや、——変なものを握っていますぜ」

「何？」

あわてて死骸の手を押えたのは、平次ではなくて、功名に急いでいた金太でした。

「こいつは狐格子に結える縁結びの紙じゃないか」（編注）

半紙を八つ切にして、半分ほど縫ったのを二本、頭の方で合せたのは、言うまでもなくその頃の女子供が遊び半分にやった縁結びで、男女の縁に關係のある社の格子には、御神籤と一緒に、この縁結びの紙片が、うんとブラ下がっていたのです。

「どれどれ」

顔を出した平次とガラッ八。

「女の方は——お留と書いてある。おや、これを見てくれ、銭形の」

金太の指先にほぐれて行つた一方の紙片には、何と、『八五郎』と書いてあるではありませんか。

「――」

平次と八五郎は思わず顔を見合しました。

「八五郎も沢山あるが、この辺じゃ――」

金太はそう言いながら、ニヤリニヤリとガラッ八の顔を覗くのです。

「お留——というのは、吉五郎の娘だろう」

平次にもこの謎なぞは解わかりませんが、とにかくにも、殺されたお柳の手の中から出たのですから、何か深い仔細しさいのあることは疑いもなかったのです。

その時、お柳の母親——乾物屋かんぶつやの女房のお倉くらは、額ひたいで歩くようにして飛んで来ました。

「――」

平次も、金太も、ガラッ八も、この真っ蒼な顔と、気違いじみた眼と、わななく諸手もろての前に、思わず道を開きました。

「お柳りゅう、——お前は、お前はまア――」

あとはもう言葉も成さぬ様子で、血だらけな娘の死骸に獅し噛がみ付いたまま、ヒイ、ヒイ動物のような悲鳴をあげながら、ワナワナとふるえているのです。

この恐ろしい母性の動乱の前に、物を訊たずねる勇氣もなく、三人

の岡っ引は、顔を見分せて立ち竦すくみました。

「親分、野郎をしょつ引いて来ましたよ」

ザワザワと立ち騒ぐ群衆を掻きわけるように、二人の下っ引は、大工だいくの吉五郎を連れて来ました。さすがに縄はかけませんが、両手を左右から押えて、貧乏揺びんぼうゆるぎもさせまじき気色です。

「御苦労だな、——そんなに手荒にしなくたっていい」

刃物の違いを見せつけられた金太は、照れ隠しにこんな事を言つて、吉五郎をさし招きました。

吉五郎は四十前後の屈強くつきやうな男で、大したよい腕ではありませんが、一刻物こくらしさが、妙に人を煙たがらせます。

「あつしをどうしようと言うんで、え？ 親分」

少し反抗的になつてゐるらしい吉五郎。

「これを見ろ、吉」

その眼の前へ、嘆きの母親を少し退どかせました。朝陽に照らされた無残な死骸おほは蔽おほうところなく、大きく開いた吉五郎の眼に焼き付けられます。

「あッ」

吉五郎の驚きは予想外でした。今までの少し太々しい態度は、一瞬しんにして消えると、五体の骨を抜かれたように、よろりと下っ引の四本の手の中へよろけ込んだのです。

真っ蒼な顔、——大きく見開いた眼、これは、自分の殺した死骸に直面した下手人の顔でないことは、どんな素人にも、たった一と目で判ります。

「吉、——これを知つてゐるだろうな」

平次は静かに水を向けました。

「乾物——乾屋のお柳ですよ」

吉五郎はようやく冷静を取戻して、乾いた唇を嘗めながら、これだけの事を言いました。

「誰が殺したか、見当位はつくだろう」

「——」

吉五郎は黙って首を振りながら、金太の顔を見上げました。

「この小刀を知らないとは言うまいな」

金太はもう一度血染の小刀を出して、吉の焼印の上に、吉五郎の鼻先に突付けました。

「あっしのですよ。どうしてこんなところに？——」

吉五郎はゴクリと固唾を呑みます。

「何処に置いてあったんだ」

平次は静かな調子でこう答を導きました。

「そいつは、有馬屋に置いてある道具箱の中にあった小刀ですよ」

「それに間違いはないな」

「間違いなんかあるもんですか、職人は自分の道具を忘れるような事はありません」

「いい職人なら、人を殺しても、道具を捨てて行くような事はあ
るまいな」

静かに言う平次の顔を、吉五郎は凝と見詰めております。

「その通りですよ、親分」

「ところで、有馬屋では何処の普請をしているんだ」

「彼方を直せ、此方を直せと、二た月も前から入りっ切りでさ、
一々道具箱を持って歩くのも面倒臭いから、預けっ放しですよ」

「何か有馬屋に気に入らない事でもあるのかい」

平次は早くも、吉五郎の語気の間から、押え切れない憤懣ふんまんを観て取ったのです。

「手間を払わずに半歳も一年もこき使われちゃ、笑ってばかりも居られないでしょう」

「借でもあったのかい」

「まア、そんな事で」

吉五郎はそれ以上のことを言いたくない様手です。

四

「近頃、娘の様子に変なことはなかったのかい、お神さん」

金太が吉五郎を番所へ引いて行った後、平次はお倉の落着くのを待って、こう訊ねる気になりました。

「変ったことばかりでしたよ、親分さん」

お倉の答は予想外です。

「そいつを詳しく話してくれ。お柳の仇討くわが、飛んだ早く出来るかも知れない」

「どんな事から申上げましょう」

お倉は心の激動を押えて、一生懸命話の緒口いとぐちを搜しております。

「お柳は昨夜の宵のうちに殺された様子だが、若い娘が、なんだってこんなところへ来る気になったんだ」

平次の問は、疑いをそのまま投げ出したようなものでした。が、

お倉は思いの外素直にそれを受けて、

「縁結びえんむすの紙を格子から取る気で来たんでしょう」

「母親のお前が承知の上でか」

「いえ、湯島の叔母のところへと行って夕方から出かけました。遅く^{おそ}なっても心配しないようにと、くれぐれも言って行つたので、泊つたこととばかり思い込んで居りました。それが、こんな姿になつて——」

お倉はまた新しい涙にひたるのです。

「縁結びの紙をどうして格子から取りたかつたんだ。お柳の手の中にあつたのは、お留と八五郎の名が書いてあつたぜ」

「娘は暗いところで、手^{てさぐ}搜りで解いたので、多分間違つたのでしよう。娘が解きたいのは、娘と又六と結んだのでした」

「又六——？ 有馬屋^{ありまや}の番頭の又六かい」

「え、あの菊石^{あばた}の又六と結び付けられて、妻恋^{つまこいさま}様の格子に結ばれるのを、娘はどんなに嫌がつたことでしょう」

「そいつはどう言うわけだい、詳しく話してくれ」

平次は思わず乗出しました。後ろからはガラッ八の八五郎、これも自分の名前まで引合いに出た不思議な事件の匂い^{きんちよう}に緊張しきつて居ります。

検屍^{けんし}の役人が来るまで——乾物屋のお倉の話は続きました。痛々しい菰^{こも}を除けて、自分の羽織を娘の死骸の上に掛けたお倉は、本当に涙片手に、この物語を進めたのです。

有馬屋のお糸と、乾物屋のお柳と、吉五郎の娘お留は、三人共十九^{やく}の厄で、身分^{へだ}の距てを他所^{よそ}に、長い間仲よく付き合つて居りました。近頃三人の心は、次第次第に離れて行くことを意識しながらも、妙な我慢と意地で、子供の時から仲を表面^{うわべ}だけ続けているといった方がよかつたのでしよう。

三人の心を離れた原因^{げんいん}の一つは、その境遇の大きな距り^{へだた}もあり

ましたが、それよりも大事なものは、神田一番と言われた美男、縫ぬい箔屋はくやの二番息子むすこたんじ丹次が、京で修業を積んで、半歳前に不意に三人の前に姿を現あらわしたことでした。

三人の間に、大きな競争が捲まき起りましたが、家族同士の親したしさから、一番先に丹次に近づいたお柳は、一番先によい条件を握ったことは言うまでもありません。

続いてお留が登場し、最後にお糸が競争圏内けんないに入って来ました。お糸の後ろにある、万両分限ぶげんの威力と、お柳の輝やくばかりの美しさと、お留の江戸っ子らしい気前は、しばらくの間、三つ巴どもえに争い続けましたが、貧ますしいお柳は次第に失い、富んだお糸が、次第に獲うるところが多くなったのは言うまでもないことです。

「三月の三日、お雛様ひなさまの晩は、うちの娘も有馬屋へ呼ばれ、お留



さんと一緒に御馳走になったそうですが、御飯の後で、奉公人の若い娘達も一緒になって、縁結びの遊びをしたのだそうです」

「――」

お倉の話は次第に核心に近づいて行きます。弥次馬の好奇心に燃ゆる眼を遠くに眺めながら、平次もガラッ八も、思わず息を呑みました。

「お糸さんとお留さんと、お柳と、娘が三人、それに縫箔屋の丹次と、菊石の又六と、もう一人入れて、男が三人」

「それはこの八五郎だろう」

平次の中言に、一寸お倉は口を緘みましたが、素知らぬ顔をしてみただけです。

「女三人の名を書いた観世縊と男三人の名を書いた観世縊と合せて六本、お皺様の前の二つの三方に載せて、目隠しをした子供に引かせ、男と女と二本ずつ三組に結び、観世縊の端っこを開いて読み上げました」

「――」

「有馬屋のお糸さんは縫箔屋の丹次と、お留さんは八五郎親分と、私のところのお柳は、執拗くつけ廻されて、嫌って嫌って嫌い抜いている菊石の又六と結び合せられたのだそうです」

「――」

「娘は病気になるほど嫌がりました。その上、縁結びはお糸さんと女中達の細工で、勝手に組合せたものと分ったのです」

「――」

平次は黙ってその先を促しました。お倉の話は、不思議に深刻味を帯びて来たのです。

「それでいい加減氣を腐らしているのに、昨日娘がちよつと有馬屋へ行つて見ると、お糸さんが面白そうに、『縁結びのお蔭で丹次さんと一緒になることを、親達も承知をしたから、三組の縁結びは、そのまま、私が自分で持つて行つて、妻恋つまこい稲荷いなりの格子に結ゆわえることにした』と言つたんだそうです」

「――」

「丹次さんを横取りされた上、又六などと一緒にされてはたまらないと思ひ込んだのでしよう。娘は湯島の叔母へ行くからと言つて日暮れ前に出掛け、何処かで時を過して、暗くなつてからこへ、縁結びを取り捨てに來たのでしよう、――可哀想にこんな姿になつて――親分さん、娘の敵を討つて下さい、これでは娘も浮ばれません、お願い、親分」

お倉は平次の方に膝ひざ行り寄つて、その羽織の裾に犇ひしとすがり付くのでした。

「よしよし、敵はきつと討つてやる。が、お神さんに心当りはないかえ、誰にも言うわけじゃない、そつと俺にだけ聞かしてくれ。お柳をひどく怨うらんでいたのは誰だい、――お柳が死んで得とくをするものは誰だい」

平次はこんな素人臭しろうとくさいことを、物柔かに訊くのです。

「娘を怒んでいるのは又六ですよ、――娘が死んで得をするのは――お留さんですよ、親分」

「お留が得をする、そいつは可怪おかしくないか、お神さん。お留じゃなくて、お糸だろう」

「いえ、丹次は浮氣者です。今は金持の娘のお糸にチャホヤして居ても、いざとなると、お柳の次と言われた、綺麗で氣性きしょうの面白

いお留のところへ行くに違いありません」

「そんな事があるだろうか、——俺にはどうも判らない」

平次にもこの消息許りは分りそうもなかったのです。

念のために、狐格子に結んである夥おびただしい紙片を調べましたが、新しいのは大部分お神籤みくじを置んだもので、たまたま縁結びがあつても、この事件に関係のありそうなのは一つもありません。

「昨夜ゆうべのうちに、誰か取ってしまったんだね、親分」

「そんな事だろうな」

お柳の死骸の手に握ったのだけを取残して、多分下手人が持つて行ったでしょう。

五

「父とつさんは？」

不意に、素晴らしい最高音ソプラノが、叱り付けるような調子で平次の耳に響きました。顔を挙げると、少し高くなりかけた朝陽の中に立ったのは、吉五郎の娘お留の、物怖ものおじしない活々した顔です。

「お留か、——気の毒だが、お前の父親は番所に引かれて行ったよ」

平次の声には、岡っ引らしくない穏やかさがあります。

「何をしたというんです、父とつさんは、どんな悪いことをしたんです」

お留の声には娘らしい若さのうちに怒りが燃えます。

「お柳あやを害めた疑いがかかったのだよ」

「まア、——そんな馬鹿なことがあるものですか」

大きな眼が少しうるんで、気性者らしい唇が、ピリピリと顫えます。おっとりとしたお柳の美しさには比べられないにしても、箱入娘の少し高慢なお糸などは、及びもつかぬ魅力を持っているお留でした。

「何が馬鹿なんだ、お留」

「だって、お柳さんを怨む筋なんかないじゃありませんか、——有馬屋ならともかく」

「吉五郎が有馬屋を怨んでいるのか」

平次の問いは間髪を容れぬ呼吸を擱みました。

「え、町内で知らない者はありやしません。父さんに無理な請負をさせて、さんざん損をさせた上、家作を取上げたり、店立てを喰わせたり、その上三月も半歳も只で使ったり——」

お留はそう一気に言いつづけてゴクリと固唾を吞みました。いかに隠し事の出来ない性分でも、こんな事をツケツケ言うのは、父親のために、あまりよいことでないと気が付いたのでしょう。

「それっ切りか」

平次は追っかけて問いました。

「え」

お留は唇を噛みます。拵え事の縁結びの事、金の力で丹次をさらって行った事、有馬屋父娘に対する怨は、まだまだうんとあるにしても、それはここで言う筋ではなかったのです。

「縁結びのことを、お前は親父へ話したのか」

「え、あんまり口惜しかったんですもの」

お留は我慢のならない忿怒を噛みしめるように、糸切歯がキリリと鳴ります。

「番所につれて行かれたところで、縄を打たれたわけじゃねえ。一と通りお役人方のお調べが済んで、罪がないとわかれば許されて帰るだろう。あんまり心配しない方がいい」

平次もツイそう言ってみる気になりました。この江戸ツ子^{かたぎ}氣質の娘が、激^{はげ}しい気性の持主だったにしても、平次には好感のもてる種類の人間です。

「親分、金太兄^{あにき}哥にそう言ってみて、何とかしてやりましょうか」
ガラッ八も口を出します。相手が若いと、飛んだフェミニストになるガラッ八です。

「そうもなるまいよ、いずれお役人方が見えてからの事だ。その前にちよつと有馬屋へ行ってみようか」

「吉五郎の道具箱から小刀を持ち出した野郎は、有馬屋にいるかも知れませんよ」

「――」

平次は黙って先に立ちました、死骸は町役人とお柳の母親に任^{まか}せて。

「親分」

ガラッ八はそつと平次の袖を引きます。振り返るとお留は死骸の側に寄って、お柳の母親に何か慰^{なぐさ}めの言葉をかけている様子です。

六

有馬屋^{ありまや}へ行って見ると、店中の空気はなんとなく硬張^{こわば}って、奉公人達の顔も、恐ろしく取済しております。

主人の治兵衛は五十を越したばかりですが、子煩悩と因業で有名な男で、平次と八五郎を虫ケラみたいに見下して居りましたが、人殺しの疑いが娘お糸の方へ向いて居ることに気が付くと、急に態度が変わって、下へもおかぬ扱いになります。

「親分、そんな事があるものですか。娘たちは、いかにも縁結びか何かやっていたようですが、若い者のする他愛もない遊び事で、そのために人に怨を受ける筈もなし、また、人様を怨む筋もありません」

「ところで、縫箔屋の丹次を、お前さんはどう思っていないさるんだ」

平次は治兵衛の饒舌を封じて、問題の中心点に触れて行きます。「どうも思ってるわけじゃございません」

「お糸さんがどうしても、一緒になりたいと言えば、婿養子にでもする心算だったと言うんだね」

「それはもう親分、世間の解らない父親と違って、母親も亡くなった事だし、大抵のことなら娘の望みを遂げさしてやりますよ」片親の甘さを遠慮もなくさらけ出して、治兵衛は縫箔屋の道楽息子を、万両分限の跡取にする気にいる様子です。

「お糸さんに逢いたい」

「何分若い娘のことで、親分に物を訊ねられたら、びっくりして何を言い出すか解りません。その辺のことはお手柔かにお願い申しますよ」

そう言いながらも、奥から娘のお糸を呼出させました。

黙って入って来て、黙ってお辞儀をするお糸の様子を、平次は暫くは黙って見詰めました。箱入娘の十九はお柳やお留よりは

若々しく、色白のお人形首ですが、何となく我儘らしい態度があつて、物馴れた平次などには、ガラッ八ほど高く買えません。「ゆうべ縁結びを妻恋様の狐格子きつねこうしに結ゆわえたのは誰だい」平次はいつものにない冷たい調子です。

「あの、お里とお冬でした」

「奉公人だね」

「え」

「時刻は？」

「戌刻いづつ前でした」

それが悪い事か——といった、誇ほこらかな色が、静かにあげた娘の顔を厳きついものにします。

「縁結びは細工をしたものだそうだね、お前と丹次と、お留と八五郎と、お柳と又六と組合せるように——」

「——」

お糸の大きい島田がガックリ下がりました。嘘うそをつくことには馴れていない様子ですが、その代り問い詰められた口惜くやし涙が、ホロホロと膝に落ちます。

「そんな事は、親分さん」

助け舟を出す治兵衛。

「ゆうべは何処へも出ないだろうな」

「それはもう親分、娘は日の暮れた街まちを見たこともありません。私も早寝が自慢で」

そう言う治兵衛の言葉には、かなりの誇張がありそうです。

「大工だいくの吉五郎は、大層有馬屋を怨んでいるようだが、ありや何ういうわけだい」

平次はガラリと話題を変えました。

「心得違いですよ。請負仕事に損をしたからって、私を怨む筋はありません。その上貸した金を取立てて文句を言われちゃ、商人は商売が出来ません。それから丹次が一度や二度自分の娘へ甘い言葉をかけたからって、私共まで怨まれる道理はないじゃありませんか、ね、親分」

治兵衛は急に雄弁になります。利害問題になると、一步も仮借しない様子が、平次にもよく呑込めました。

「番頭の又六に逢いたいが――」

「店にいる筈ですよ」

立って案内する治兵衛を押えるように、

「いや、その前に吉五郎の預けてある道具と、又六の部屋を見せて貰いましょうか」

「へエ――」

治兵衛を先に、平次と八五郎はそれに続けました。

納戸に預けて置いた吉五郎の大工道具には、一つ一つ吉の焼印が捺してあり、小刀は一挺ありませんが、出そうと思えば、誰でもここから取出せることは言うまでもありません。

「ここが又六の部屋で、――外の奉公人と一緒に寝泊りをしております」

隣の六畳の暗い部屋を、治兵衛は指しました。

唐紙へ手をかけると、建付の悪いに似ず、心持よく滑って少し荒した古畳の六畳が、蔽うところなく一と目に見られるのでした。

「荷物を見ても構わないだろうな」

「へエ――」

又六の荷物——古い葛籠つづらを押入から出させて、平次は蓋ふたを払いました。

一番上は節用集せつようしゅうが一冊、着物が五六枚、それを一枚一枚取出すと一番下に渋紙しぶしに包んであったのは、鞆さやも柄つかもない、ヒ首あいくちが一口。

「あッ、そいつだ、親分」

渋紙をほぐすと、中から出たのは、刃渡り八寸ほどの、薄刃ながら凄わづものい業物。窓の明りに透すかすと薄霞うすがすみを刷はいたような脂あぶらが焼刃の上を曇らせております。

平次が、そっと目配せをすると、ガラッ八は疾風しつぷうの如く飛びました。続いて店の方から、叱咤と組うちの凄まじい響き。

「親分、この野郎、逃げ支度をしていましたよ」

八五郎は番頭の又六の首根っこを掴んで、ズルズルと引摺って来ました。

七

「又六、皆んな申上げて、お上の御慈悲を願え。お柳りゅうを殺したのは手前てまえだろう」

平次は又六を引据えて、少し嵩かさにかかります。

「違います。親分さん。あッ、しじやありません」

又六は醜怪しゅうかいな顔を挙げて、精いっぱいの抗弁を続けました。

「手前てまえでなきや誰だ——お柳はしに弾かれた怨み、このヒ首あいくちで殺して、吉五郎の小刀を死骸の側へ捨てて来たんだろう」

「違います、親分」

「鞆さやと柄つかを何処へやった、大方血が付いて捨てたんだろう」

「血の附いた鞆と柄を捨てたのは私ですが、お柳を殺したのは私じゃありません」

「そんな馬鹿なことがあるものか」

平次は又六のしぶとさに腹を立てて、日頃にもなくその襟髪に手を掛けました。

「親分、それじゃ皆んな申上げてしまいます。聞いて下さい」

又六は観念した様子で、縁側の陽の中に、檻ぼろぎれ褌切のように蹲うずくまりました。平次はその様子を見定めると、又六の舌の動きを滑らかにするために、治兵衛とお糸おやこ親娘を、眼で追いやったことは言うまでもありません。

又六の話は奇っ怪でした。が、その筋だけを拾うと、――

三年越し乾物屋のお柳りゅうに焦がれた又六は、どう誠心まごころを傾け尽しても、弾はじかれ、辱はづかしめられ通しなのに気を腐らし、いつそお柳を殺して、自分も死のうと思ひ定めたのが昨夜ゆうべでした。

その頃お柳は別に悩みにひしがれて、妻恋稲荷に行っていると知る由もありません。納戸へ入って、棚の上に置いた自慢あいの匕首くちを捜しましたが、どこへ行ったか見当らず、心せくまま、側にあった吉五郎の道具の中から、手頃な小刀を取出し、明神様の裏を、妻恋稲荷の前へ行くと、チラリ境内に、若い女の影が見えたのです。

――お留だな――

眼のよい又六は、遠い灯の中に、咄嗟とっさに相手を見極めました。が、何か素振りが変だったので、われにもあらず稲荷様の境内に入ると、お留は早くも姿を隠して、稲荷の格子の前に、大輪の花のように崩折れているのは、今殺そうと思ひ込んで来た相手のお柳の

断末魔だんまつまの姿ではありませんか。

又六は仰天ぎやうてんしました。が、介抱するまでもなく、お柳はこと切れて、最早どうすることも出来ず、フト気が付くと、足下に血の染んだまま投げられてあったのは、自分の秘蔵あいくちの匕首さやと、その鞘さやです。

誰が一体有馬屋の納戸なんどから匕首あいくちを持出して、お柳を殺したか、そんな事を考える暇ありません。それを見ると又六は、ぞっと臆病風おくびょうかせに誘われて、お柳を殺して死ぬ気だったことなどはけろりと忘れてしまい、自分の匕首を拾って、その代りに吉五郎の道具箱から持って来た小刀を血潮の中に抛ほうり出し、後をも見ずに逃げ帰ったというのです。

「お留さんに訊けば解ります。刃物を変えたのは私ですが、お柳を殺したのは私じゃございません。親分、これは少しの飾りもない、正直真まつ当とうのことでございます」

そう言う又六の言葉には、馬鹿馬鹿しさと正直さはありますが、嘘も駈引あいくちもあろうとは思われません。

「血染の匕首あいくちなんか、何だって隠して置いたんだ」

平次はもうそんな事より外に訊くこともなかったのです。

「御殿奉公した母親の形見で、これは捨てたくなかったのです。鞘さやと柄えは、あんまり血に汚れたので神田川へ抛ほうり込みましたが、中身だけは捨てる気になりませんでした」

又六の顔は、涙と汗に塗れて、山椒魚さんしょうおのように醜みにくく光ります。

「さア解らねえ、——下手人は誰でしょう、親分」
ガラッ八はキナ臭い鼻を向けました。

「お留でなきやあ——縁結びの仲間にされた八五郎だろうよ」

「冗談でしょう、親分」
八五郎は大面喰いです。

八

「銭形の」

「おや、大根^{だいこん}島^{ばたけ}の兄^{あにき}哥^かか、吉五郎はどうしたえ」

銭形平次は、明神棟の裏で、ハタと金太に逢いました。その日の夕刻です。

「吉五郎は日暮れ前に家へ帰される筈だよ、——証拠の小刀が傷口に合わないのは、お役人方も承知だ。あれじやお奉行へ送るわけに行かねえ」

「そうか、——そいつは大変だ。吉五郎が帰る前に、少し当って置きたいことがあるんだが——」

「目^め星^{ぼし}でも付いたのかい」

「まアそんなところだ、金太兄^{あにい}哥^かもいっしょに来て見るがいい」
平次の自信ありげな態度は、金太とガラッ八をすっかり征服しました。

行く先は大工^{だいく}の吉五郎の留守宅。

「御免よ」

「あッ、親方さん方」

入口に迎えたお留^るは、すっかり顛倒^{てんとう}して居ります。

「吉五郎はまだ帰らないかい」

「え」

「少し邪魔をするよ。さア、金太兄^{あにい}哥^かも八も入るんだ」

平次は無遠慮に娘一人の家へ入ると、日頃のよいたしなみもかなぐり捨てて、四方をキョロキョロ眺めて居ります。

「銭形の、——もう吉五郎が帰って来る時刻だぜ」

金太はその前にやる事があった、といった顔です。

「何の役にも立たないだろうが、二人手わけをして、家中を捜してくれ。血の附いたものでもありやしめたものだ、俺は一寸外に行って来る」

平次は言い捨てて、プイと外に出ました。その後で、金太と八五郎が、お留の憤々たる忿怒の前に、どんなに深刻な家捜しをしたことか。

やや四半刻ばかり、四方が雀色になった頃に、平次は勝ち誇つた様子で帰って来ました。

「何にもないぞ、銭形の」

それを極り悪く迎える金太。

「もういい、それで沢山さ。証拠は揃ったよ」

平次は日頃のない有頂天さです。

「何が揃ったんで、親分」

ガラッ八は行燈を点けて来ました。

「お留、白状してしまえ、お慈悲を願ってやるぞ」

平次はズイと寄ると、娘の肩を押えました。

「あれッ、何をするのさ、白状することなんかありやしない」

お留は気性者らしく反抗を続けながらも、ヘタヘタと敷居際に崩折れます。

「お柳の殺された時、側に居たのはお前だ——又六が見たから間違いはない」

「でも」

「格子こうしから縁結びえんむすを二つ引千切って、うっかり捨てるのを忘れて持って来た筈だ。人一人殺した後だから無理もないが、その始末をしなかったのは落度さ。これを見るがいい、お勝手の土竈へつついの中に、半分が燃え残っていたぞ。読んでやろうか——お糸、丹次、——お柳、又六——」

平次の手には燃え残った紙片が二つ、ヒラヒラとお留の眼の前に動きます。

「あれ、止しておくれ、そんなもの」

お留は汚けがらしいものを見るように、顔を反けました。

「まだある。お柳りゅうを殺したヒ首あいくちを、有馬屋から持出せるのはお雛ひな様の御馳走に呼ばれたお前とお柳の外にはない。殺されたのがお柳だから、ヒ首を持出して殺したのはお前さ」

「——」

お留はもう物を言いませんでした。

「俺は今それを思い出したから、有馬屋へ飛んで行って、出入りの者と、納戸の間取りを見て来たよ。——お留、言訳はあるまい。

神妙にお縄を頂戴せい」

平次は一步近づきました。懷中ふとしろをまさぐると、銀磨きの十手が、その右手にキラリと光ります。

敷居際ぎわに坐って、深々とうな垂れたお留の姿は、見るもあわれな萎しおれようでした。勝気で美しいお留の、こんなに打ちひしがれた姿を、ガラッ八は想像もしたことはありません。

「親分」

ツイ娘かばを庇かばってやりたいガラッ八。

「手前の知ったことじゃねえ、黙っている」

叱り飛ばした平次の左手には、捕縄がバラリと捌さばかれます。

行燈の薄明りに照らされて、お留の姿は神々しくも美しいものでした。

が、その時――

「親分、私を縛って下さい。娘に罪はない、――お柳を殺したのは、この私だ」

飛込んだのは親父の吉五郎、お留と平次の間に割って入ると、諸手を後に廻して、観念の顔をあげるのです。

「あれ、お父さん」

驚くお留。

「いや、止めるな、お留、――縁結びの話聞いて、俺はカッとなつて飛出した。――それはお前も知つての通りだ。あの晩、お糸の阿魔あまが稲荷様に来るに違ちがえねえと思つて、有馬屋の納戸から、ヒ首あいくちまで持出して用意したんだ。――有馬屋には重なる怨うらみ、親父の治兵衛を一と思いに殺したんじや腹が癒いえねえ。眼へ入れても痛くねえようなお糸を殺して、うんと思ひ知らせる心算つもりだったんだ」

「――」

吉五郎の言葉の予想外さ。お留も、平次も、金太もガラッ八もただ聴き入るばかりです。

「狐格子で何か細工をしている若い娘、夜目にお糸と思ひ込んだのも無理はあるめえ。後ろから一と思ひに斬つて、格子から新しい縁結びを引千切つて帰つたのはこの俺だ。」

――翌る朝、現場げんばへつれて行かれて、死骸を見た時の驚きを察し

てくれ、お糸と思い込んで殺したのは、可哀想に乾物屋のお柳だ」

「――」

「思い切って名乗って出ようと思ったが、後に残るお前が可哀想で、逃れるだけは逃れてみようと思ったのは俺の未練だ――お留、勘弁してくれ」

「お父さん」

「お前が縛られそうになっちゃ、黙っていられねえ、――親分さん、この通りだ。私を縛っておくんない。有馬屋が安穩に暮すのは業腹だが、それも今更どうにもなるめえ。俺が余計な事をしなくたって、天道様は見通しだ、――人間の手でどうかしようと思っただのが間違えだろう」

「お父さん、お前は、お前はまア」

這い寄るお留と互いに手を取合って、親娘二人の、身も浮くばかりの悲嘆を、平次は暫く黙って見て居ましたが、

「金太兄哥の手柄にしてくれ」

一步身を退いて、親娘の悲嘆に顔を反けます。

「そいつは、銭形の――」

と尻ごみする金太。

「いや、最初吉五郎に目をつけたのは金太兄哥だ。なまじつか、俺が余計な事を言ったから、お役人方も吉五郎を許す気になったんだ、手柄はやはり金太兄哥だよ」

平次はガラッ八を眼で誘って滑るように外に出ました。

×

×

「親分、本当に吉五郎が下手人ですかい」

ガラッ八は後ろから声をかけました。絵解きが聞きたい様子で

す。

「本当とも、俺は吉五郎が外で聞いて居ると知ったから、わざとお留を疑うように見せたのさ。吉五郎に白状させたかったんだ。自首するといくらか罪が軽くなる」

平次の言葉は淋しそうです。

「一番嫌な奴は、丹次の野郎じゃありませんかとガラッ八。」

「その通りだよ。娘三人の心持を滅茶滅茶にするより、いつまでも独り者の八五郎の方が立派さ」

「その気で付き合って下さい、親分」

「ハッハッ、これで、八の嫁話も当分沙汰止みか」

「有馬屋の親娘は憎いじゃありませんか」

八五郎はまだ憤々して居ります。

「腹を立てるなよ、吉五郎も言ったじゃないか、天道様は見通しさ」

「気の長い天道様じゃありませんか」

「まあいい、——それよりも可哀想なのはお留だ。あの晩、腹を立てて飛出した親父を心配して、稲荷様の境内へ行つて又六と顔合せたんだ」

「——」

平次の声は濡れました。

「人殺しの娘じゃ世話の仕手もあるめえ。可哀想にあの気性じゃ苦勞をするだろう」

「親分——」

「岡っ引はいやだなあ、八、せめてお留の行末でも見てやりたい

が」

三月の風は、生なまぬ温く二人の汗ばんだ顔を撫でます。八五郎はブルンと身を顫ふるわせました。

(編注)

「木連格子^{きつれ}」と「狐格子」の表記の混在は底本の通りです。

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

初出―「オール讀物」昭和十四年三月号 文藝春秋社

底本―「錢形平次捕物全集」第五卷 河出書房 昭和三十一年七月十五日初版

編集・発行 錢形倶楽部



銭形倶楽部

<http://www.zenigata.club/>